

学部

	コース名	科目名	教員	時限	学びの内容
1	聖書	旧約聖書概論Ⅱ	菊池	金曜 3・4 時限目	「キリストと世界Ⅱ：旧約」の続きとして、旧約各書を概観します。春学期は特に旧約聖書全体の背景となる部分（歴史、文化、地理、言語、思想）、モーセ五書に焦点を当てました。概論のⅡでは、春学期を土台に各書の基本的な内容理解に努めます。各書を歴史と聖書全体の中に位置づけ、文学類型と解釈の前提となる視点を捉え、各書の主題を明確にし、主要な登場人物、出来事の把握に努めます。そのうえで、各書に生き生きと語られるメッセージ、またその状況を超えて今日私たちに語る主の声を聞き、また新約聖書を含めた、聖書全体としての一体感を感じていきたいと思います。概観とはいえ、限られた時間で旧約聖書全体を授業のみでカバーすることは困難です。肝要なのは通読と、教科書当該箇所を読んで、各書のイメージを自分で持つことです。春学期同様、プレゼンテーションを行います。また小テストを数回行い、旧約聖書の世界に親しみを深めていきたいと願います。生涯読み続ける書として今の機会をとらえましょう。
2	聖書言語 (ヘブライ語)	ヘブライ語Ⅱ	菊池	火曜・金曜 2 時限目	ヘブライ語Ⅰに引き続き、聖書ヘブライ語文法の基本を積み重ねて行きます。この言語において重要な動詞の基本的な変化形の習熟を徹底して目指します。また、動詞の習得とともに、蓄積されたヘブライ語語彙によって、より多くの文例に触れ、ヘブライ語に慣れていきます。特に、履修者は、各課に登場する新しい単語と動詞の活用を記憶するだけでなく、自分にとっての未知の語、未知の形に対する応用できる力を養っていく必要があります。学期終了時には、ヘブライ語聖書中の有名な聖書箇所については、語の分解(parsing)とともに、意味を汲み取れるようになることが期待されます。また、語根から派生する言語の特長をつかみ、日本語訳聖書に現れない原語独自の感性・表現・音・語感を徐々に掴むことを大切にします。そして原語のより繊細な意味に対する探求心が増し加わることがあれば、釈義へと繋がっていきます。この時点ですでに言語としての難しさ以上に聖書を原典で読む喜びや幸いへの感覚を増していくはずです。
3	聖書言語 (ギリシア語)	ギリシア語Ⅱ	須藤	火曜・金曜 2 時限目	「ギリシア語Ⅱ」は、春学期・秋学期・冬学期を通して学ぶギリシア語文法コースの第二部です。新約聖書を深く理解するためには原典で読解できることが望まれます。新約聖書は、ヘレニズム期に古典ギリシア語が広くヘレニズム世界で使われるようになったコイネー・ギリシア語で書かれています。したがって、新約聖書を原典で読解できるようになるた

					めには、コイナー・ギリシア語の文法的知識が欠かせません。本授業では、ジェレミー・ダフ著『エレメンツ・新約聖書ギリシア語教本』を用いて、動詞の法から名詞の第3変化までの範囲を学びます。 具体的には、毎回授業の初めにギリシア語単語の小テストを行って単語力の強化を図ると共に、毎回出される課題と期末まとめ課題に取り組むことで文法知識の定着を目指します。本コースのねらいは、新約聖書をギリシア語原典で読むことを前提にした、コイナー・ギリシア語文法の獲得ではありますが、同時に、新約聖書のギリシア語テキストに徐々に馴染んでいくことでもあります。
4	神学	組織神学Ⅲ	齋藤	水曜 3・4 時限目	組織神学Ⅲは、キリスト論と救済論の二つの部分から成っています。 キリスト論は、三位一体の第二位格であるキリストの仲保者としての職務に関係するもので「人格論」と「業論」からなります。人格論としては、歴史的な教理形成の経過、特にニケヤ信条からカルケドン信条に至る流れを踏まえつつ、キリストの「二性一人格論」を理解することを目的とします。業論としては、仲保者としてのキリスト・イエスの二状態における三職論（王、祭司、預言者）を中心に扱います。 救済論は、キリスト・イエスにより完成された「贖罪の業」を基盤として、永遠の聖定に基づく救いが、聖霊によってどのように神の民に適用されるかを学ぶものです。救済の秩序（ordo salutis）における聖霊の働きを理解し、救済論を聖霊の業として適切に把握することを目指していきます。聖霊論との関わりも深い内容ですので、組織神学Ⅲの後半は聖霊論とも呼べる内容となっています。
5	(同上)	キリスト教史Ⅰ	須藤	木曜 3・4 時限目	「キリスト教史Ⅰ」は、ルターに始まる宗教改革から現代の福音主義に至るキリスト教の歴史を扱います。キリスト教の歴史を学ぶことは、キリスト教の本質を理解する上でも欠かせません。本授業では、ルターに始まるプロテスタント主義を中心とした歴史を堅実にたどることを通して、現代のプロテスタント教会が、歴史のただ中で働かれる神の導きと、キリスト者の命をかけた努力の結果であることを学びます。具体的には、宗教改革以降を、宗教改革・17～18世紀・19世紀・20世紀という四つの時代に分け、それぞれの時代における重要なキリスト教の人物や出来事を解説します。本クラスのねらいは、キリスト教の歴史を学ぶことを通して、歴史の中で働かれる神という思想を深め、それによって、自分に与えられたヴィジョンに対して歴史的確信をもつことができるようになることです。くわえて、キリスト教教義へ探求的にアプローチするための基礎能力の習得が見込まれます。

6	ユース ミニストリー	ユースミニス トリーの神学 と実践	岡村	木曜 1・2 時限目	「ユースミニストリーの神学と実践」は、福音的な神学、福音的な聖書理解の基礎に立ちつつ、教育学、心理学、社会学、牧会学等の側面から、現代のユース（中高生）と彼らへのミニストリーについて考えるクラスです。学生は、まず「ユース」と「ミニストリー」というそれぞれの言葉の意味について学習し、対象者が誰であるか、そして具体的にどのような働きなのかを知るところから学びを始めます。聖書に書かれたユースミニストリーに関する記述を調べ、ユースミニストリーの研究が盛んな米国での取り組みについて学び、更にユースミニストリーに関わる者がどのような心構えとトレーニングを必要とするかについて考察します。学期の後半では、ユースミニストリーの現場で働く方々から直接話を聞き、更に学生が通うそれぞれの実習教会でのユースの様子についてレポートします。また今後の具体的な取り組みのアイディアに関する学生によるクラス発表を、相互評価しながら学び、既成の概念にとらわれないユニークなユースミニストリーへのアプローチを共に模索します。
7	教会と社会	異文化理解入 門	篠原	水曜 3・4 時限目	グローバル化した現代において異文化理解は必須の学びです。また、広い意味において、自分以外の他者は異文化だともいえます。異文化理解は文化を超えたコミュニケーションに必要なだけでなく、自分以外の他者と健全な人間関係を築いていくために必要なスキルでもあるのです。このコースでは異文化理解に関する基本的な知識と姿勢について学んでいきます。また、神学的な視点から異文化理解（他者理解）の意義について考察していきます。このクラスの目的はキリスト教世界観に根差した「カルチュラル・インテリジェンス」(Cultural Intelligence) を身に着け、自分と異なる他者と共に生きるとること基礎を学ぶことにあります。TCUの学生の20%は留学生という環境において、文化の壁を越えた多文化共生の形を模索していきます。授業での学びとキャンパスでの実践的な取り組み（寮生活、委員会活動、教会実習）を通し、それぞれに「カルチュラル・インテリジェンス」を身に着けていくことを目指します。
8	(同上)	キリスト教公 共福祉学入門	井上	水曜 5・6 時限目	福祉の概観を様々な領域と現場のゲストスピーカーによって示します。それぞれの時間にも身近な福祉の話題を話し合いますが、特に最後に総合討論を行い、よりよい福祉文化をキリスト教からつくっていくことを考えます。従来の社会福祉と呼ばれている分野を特に地域教会と行政がどのように協働できるかという視点を入れて、キリスト教公共福祉として新たに捉えなおすことを目的とします。「あなたも行ってケアなさい」(ルカ 10:37) というイエス・キリストの「ケア命令」としての隣人愛を実践

					する基礎を学びます。 キリスト教はその長い歴史を通して修道院、国民教会、教区教会を通して今日の福祉の先駆的働きをしてきました。そしてこれは宣教の働きの一環としてなされてきたということを学びます。それをキリスト教の宣教の働きとして取り戻していくために、高齢者、障害者、児童等の各部門での福祉のあり方を理解し、教員の福祉現場での経験知を分かちながら、地域教会の役割について考えます。このクラスでは教員の介護実務経験が活かされています。
--	--	--	--	--	---

大学院

1	聖書学	五書	木内	火曜 3・4 時限目	「五書」は、旧約聖書内だけでなく新約聖書へとつづく流れの中で主要な聖書神学的テーマを含むという点で極めて重要である。19世紀以来の五書研究では文書の生成過程が問われ、断片的に捉える見方が優勢であったが、五書全体を有機的に見るアプローチが必要不可欠である。本科目は講義形式で、正典論的方法論を用い、人間の堕落、「信」の必要性、律法授与等のテーマを、五書の特定箇所を厳密に釈義を通して考察する。人間の堕落を語る創世記3章についてのやや詳しい釈義の後、族長物語における「信」の本質に進み、そして、律法が与えられた目的を出エジプト記、そして、レビ記において考察する予定である。 五書を有機的に見る見方は、少なくともあれ、これまでもいくつかあったが、上記のテーマに従って五書を見て行くときによりよくその統一性と有機性が把握できることが出来ればと考えている。 このことを通して、「罪」「律法」「宥め」等のキリスト教にとって重要な概念の理解を深めることを目的とする。
2	実践神学	キリスト教と教育	岡村/徐	火曜 1・2 時限目	日本の公教育における宗教教育に関する議論や研究を対象とする「宗教教育」とは異なり、欧米の多くの高等教育機関において確立した学問である「宗教教育学(Religious_Education)」は、宗教の概念、教義、儀式、習慣、歴史等の伝達プロセスやその方法論等を取り扱います。前半は、講義形式で宗教教育学の歴史的背景と全体像を把握しつつ、今日における宗教教育学の視点の有用性や課題について理解を深めます。後半は、宗教教育学研究の第一人者であるメリー・エリザベス・モアーが提唱する5つの宗教教育方法論と、それらの実践的取り組みについて演習形式で学びます。 (モアーは「開かれた教育」「開かれた教育者」の必要性を主張する今日の北米における宗教教育の牽引者の一人です。彼女の唱える真の教育者の姿とは、既成概念に縛られる事なく、世界で起こる様々な出来事に生徒の目を向けさせ、教育の対象である生徒との関係性を重視しつつ、自らも彼らからも学ぼうと心がけ、常

					に新しい学びの可能性に目を向ける教育を行う教育者です。)
3	歴史神学	近現代のプロテスタント神学	須藤	水曜 3・4 時限目	「神学・教会特殊研究Ⅰ（近現代のプロテスタント神学）」は、近現代の多様な神学を扱います。近代が理性の時代だとすれば、現代は多様化の時代だと言えます。これに呼応した形で、シュライエルマッハーと自由主義神学が近代神学を形成しましたが、現代になると、特に19世紀後半は神学が多様化し、福音主義神学を含めた神学の世界的潮流を把握することもままならない状況です。同時に、神学の発信地がかつてのヨーロッパ一極からアメリカへ、さらに世界へと広がりを見せています。したがって、世界の人々との相互理解や宣教の視点からも、現代神学を正しく把握することが求められます。本特殊研究では、学生は指定されたテキストの読書範囲を事前に読んで、リスポンス課題を提出します。必要であれば、ディスカッションや発表形式を取り入れます。本特殊研究のねらいは、各自が近現代神学の各テーマについて自分で考え、公平に評価し、それによって、近現代神学を適切にかつ健全に理解できるようになることです。
4	宣教学	日本キリスト教史	山口 (陽)	水曜 5・6 時限目	学部の「日本キリスト教史（通史）」はアジア太平洋戦争期までを扱い、大学院の「日本キリスト教史」は日本プロテスタントの戦後史を扱います。最初の2回で講義を行い、戦中と戦後にそれぞれ一回ずつをあてて概観します。3回目は学生全員が一冊ずつ各個教会100年史を読みディスカッションを行います。ここでは教会における歴史資料保存や教会史の執筆についても考えます。7回は学生の発表に基づく演習です。演習は、戦後70年を7回に分け、その時代について考察しますが、学生はそれぞれその時代のテーマを決めて発表します。これは最初の時間に相談して決めます。発表に基づいて教員の解説も加えつつ、全員での討論を行います。本学の背景にあるプロテスタント福音派の戦後史を、いわゆる主流派のそれと比較検討し、その特徴と課題を考察します。こうした検討を通して、学生は自分の所属教会のおかれた位置を確認し、これを尊重しつつ他のキリスト教とも協働できるよう教会史的知識を身につけることをめざします。